

子どものいる暮らし——男・夫・父

子どもとの生活で感じる日々

園田 雅文

平成十年末、突然息子の拓海が小児喘息の発作を起こし入院した。十二月三十日から一月五日まできつちりと親の正月休みに合わせて入院してくれた、とても共働き両親思いの子どもである。

入院中は添え木と包帯で右手をぐるぐる巻きにされ、それに点滴チューブが付いていたので、ベッドの上で遊ぶことしか許されず、事情の分からない子どもにはとても辛い思いをさせることになった。代わるものなら代わってや

りたいという月並みな事を本当に思うものだと実感した。幸いにして大したことはなく、その後元気に保育園に登園している姿を見ると、家族が健康であることが改めて大切だと思うのである。

さて、我が家の構成は、共働き会社員の私と妻、それに長男拓海のどこにでもいるような三人家族である。結婚して五年、そろそろ二人で遊び歩くのも飽きたなあ、なんて思っていた矢先に授かった子どもだった。生まれるまでの十か月間はわくわくドキドキの楽しい(妻は苦しかっただろうが)時間だった。今から思えば、その後の子育てのわくわくドキドキに比べれば大したこと無かったのだが、その時は本当に誕生が待ち遠しかった。

拓海が誕生したのは平成九年の十月。二七五〇グラムの少々小さめの子どもだった。その日

は満月の翌日で病院はとても忙しく(本当にそういう周期があると看護婦さんに聞いた)、生まれたての子どもをタオルにくるんで「はい、お父さん！」と言って渡された。当然ながらお父さんの実感など皆無の新米お父さんは、落とさないように気を付けながらその場に立ちつくすしかなかった。タオルの中では生まれたての命が「フニャフニャ」と妙な音を立てている。思わず最初にかけて言葉は「おっす、元気か?」。誰に言ってるんだ……?

誕生して一週間程で自宅に戻ってきて、それからが大変。幸いに妻の実家のお母さんにしばらく一緒に住み込んでもらうことになったの



で、家事全般はお母さんにお任せになってしまった。妻は曜日の感覚を無くし、授乳の周期三時間で一日を八回〜十回程に分けて暮らしている。日中会社に勤めている私は、夜だけその周期におつき合いするのだが当然寝不足になる。休日は妻と二人で子どもの周期に合わせて短い眠りを貪るような生活になってしまった。お互いストレスは溜まるのだが、子どもの何気ない仕草や笑顔で全部無くなってしまう。無条件の親ばかはストレス解消に役立つようである。

お正月も終わり、子どももだんだんしっっかりしてくると、生活にも一定のリズムができてきた。夜も眠れるようになり、近所のスーパーにお買いものにも出かけられるようになった。このころになって子どもの可能性は突然発芽するのだと初めて気が付いた。妻に言わせると「今

頃なにさ」のだが、色々な事が突然一夜にしているように、少なくとも私には見えた。笑顔、手指の動き、寝返り等々子どもが成長していくのが日々実感できるのである。

「これは面白い」、良い所取りと言われようが、男の育児参加は中途半端と言われようが、子どもの変化を見るのはとても楽しい贅沢だと言気がついた。たくさんの辛い事に勝るほど「発見」がある。当たり前ではあるが、育児のインセンティブは子どもの変化なのだと改めて認識した時期であった。

妻の体も回復し、子育ての生活も一定のリズムで過ごせるようになってきた春先、拓海を預ける保育園を探すことになった。幸いにも親切的な市役所の担当の方と保母さんに導かれて、市立の保育園に入園することになった。これで妻も職場復帰の目処がたった。良かった、良かった。

た！と思っていたのもつかの間。「やっぱり共働きはそんなに簡単じゃない……！」てなことをこの後思い知るのであるが、この時は広い保育園に満足、人見知りして泣くことのない拓海にひとまず安心していたのだった。

拓海が八か月になり、保育園に登園するようになると、共働きと子育ての生活の中で夫婦の役割分担が自然にできあがった。朝食の準備かたづけと登園、夕食のかたづけは私の仕事。拓海のお迎え、洗濯、夕食の準備は妻の仕事になった。自我の育ってきた拓海はわがままも言わない、なかなか親の言うことを聞かない。こんな状況に私や妻にはどんどんストレスが溜まるようになってきてしまった。やはり共働きは簡単ではなかった。妻の方が拓海と接している時間が多い分、ストレスも多いようである。仕事で集中している時のほうが、ストレス解消になっ

ているというような発言を幾度も聞いた。私も育児に家事に参加しているつもりではあるが、家事の役割分担をきちんと守れないことは圧倒的に私の方が多い。以前新聞で読んだのだが、夫婦間の役割分担を完全に固定化してしまうのはお互いに逃げ道がなくなってしまうので良くないという理屈を隠れ蓑に、時々さぼってしまう。妻に言わせると所詮「男の育児、家事」だそうで、まだまだ本当の苦勞をしていないとのことである。

そんな中でもストレス解消に役立つため、できる限り私の仕事としてさばらないように努力している事がある。拓海との入浴である。乳児のときは男の力が必要だから、歩けるようになったら押さえつけなくてはならないから等と理由を付けながら、その実入浴はとても楽しく一日の疲れを癒してくれるような行事なのであ



る。だから最近では職場の飲み会でも二次会は遠慮して早く帰宅するようにしている。しばらくしてこれに飽きてしまうまで、つき合いは悪いけど職場の皆さんには許してもらおうしかない。

拓海は幸いにして今回の入院までの半年間健康で大病をすることもなく、朝夕の延長保育も含めて一日約十時間を保育園で過ごしてきた。

保育園では〇歳児でも、両親参観や運動会等の行事がある。もちろん一人では何もできないので、保母さんが全面的に助けられるのであるが、保母さんの献身的な態度には頭の下がる思いがする。自分の子どもでもないのに、あそこまで献身的に尽くしてくれるのはなかなかできることではない。

子どもを早くから保育園に預けることには賛否両論の意見がある事を承知しているが、私はメリットの方が大きいように感じている。ま

ず、たくさんのお友達に囲まれて生活するの

で、昔の大家族のような生活環

境を作り出せる

事が利点の一つ

である。ある子

どもにはあやし

てもらえ、ある子どもとは玩具を取り合って喧

嘩し、自分とは違う他人を身近に見て育つこと

から社会性を学ぶことができる良い環境だと思

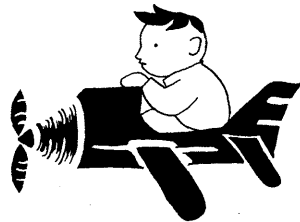
う。昔の大家族では自然にその環境が備わって

いたのだが、今のような家族構成でははなはだ

心許ない。次に規則正しい生活を身につけるこ

とができるのもメリットである。食事や昼寝の

時間、後かたづけといった生活習慣が驚くほど



早くから身に付いていくのである。むしろ私たちが両親が休日とそのリズムを崩してしまっているのが実態である。確かに親とともに過ごす絶対的な時間は少ないが、その分平日の夜や休日にめいっばいの「つき合い」を心がけているので、さしたる不安も無い。拓海も順調に育っている。保育園万歳だ！

これから子どもが病気になったり、第二子が誕生したりと親の負担、特に母親の負担が大きくなることが予想される。共働きという環境の中で、保育園の方々にもお世話にならなくては生活できない。それでも、妻が働きたいと言う間は一生涯協力しようと思っている。妻の社会参加は我々夫婦の生活の大変重要な要素であり、最も基本的な構造だと思っているからである。

先日、寒くなった登園途中に拓海をコート

下にくるんで抱きしめながら歩いていてふと感じたことがある。拓海を寒さから守っているはずの私が、拓海の体温でポカポカ暖かいのである。寒さから守られていたのは私の方かもしれないと感じた。この関係は育児でも同じで、親が子どもを育てているのではなく、むしろ子どもが親を育てているのではないかと最近よく思うようになった。子どもを持つことで、夫婦としての関係や親としての自覚を子どもに育ててもらっているのではないだろうか。そんな事を考えながらの楽しい登園道である。

生まれてくれてありがとう。拓海！

(千葉県・市川市立塩浜保育園父母)